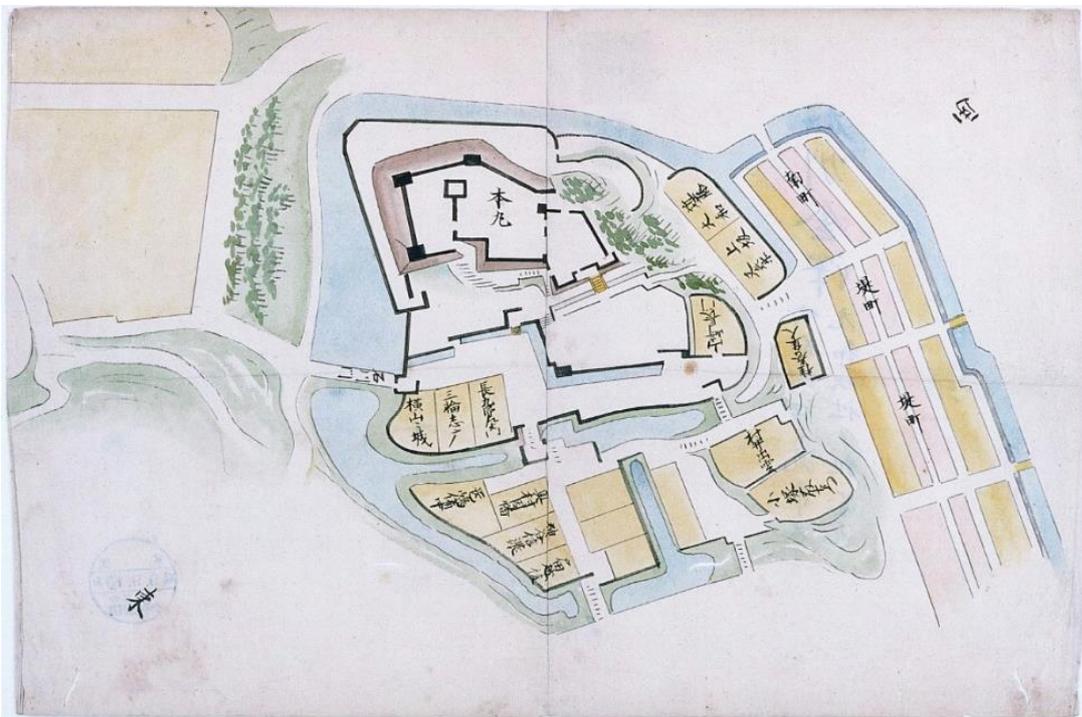
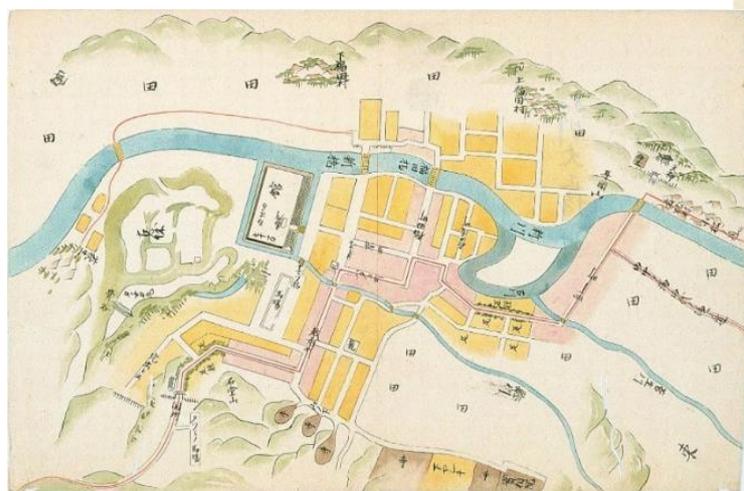


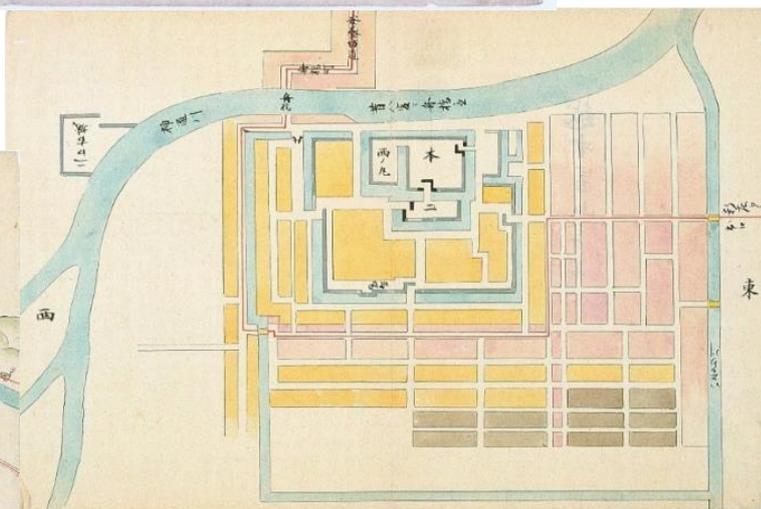
諸国の城図



加州金沢城図(098.6-66-98)



加州大正持城図(096.6-66-96)



越中富山城図(096.6-66-99)

平成29年2月18日(土)~4月16日(日)

金沢市立玉川図書館 近世史料館

はじめに

近世史料館では加賀前田家の居城である金沢城を描いた城図、その城下を描いた城下図を多く所蔵していますが、そのほかにも加賀・能登・越中の城図、さらには全国各地の城を描いた図もあります。とくに加賀藩兵学者の有沢永貞が編纂した城郭図集である「諸国居城之図集」は、全国のおよそ150もの城を描いた貴重な城図集といえます。また、城を描いた図としては兵学修養の場においてテキストとなった城取図などもあります。

本展示では、「諸国居城之図集」からいくつかの城図を取り上げるとともに、諸国の城図や城取図などを紹介します。また、近代における金沢城の様相がうかがえる史料についても展示します。

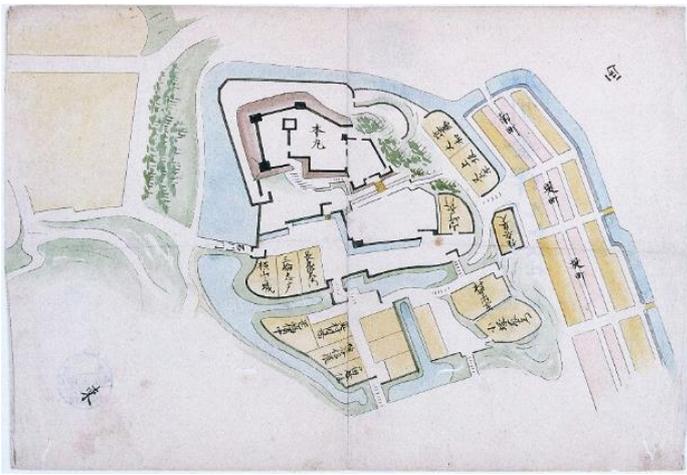
「諸国居城之図集」(098.6-66)

「諸国居城之図集」は、加賀藩兵学者である有沢永貞が寛文から元禄期にかけて編纂した城郭図集であり、元禄5年(1692)に序文が作成され、完成しています。有沢永貞は寛永16年(1639)生まれで、叔父の関屋政春に師事して甲州流軍学の教えを受けるとともに、山鹿素行や佐々木秀乗のもとでも研鑽を積み、さらに北条流・楠流も学ぶなど、加賀藩における有沢兵学を作り上げた人物です。

この「諸国居城之図集」は、五畿七道(畿内・東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道)に分類され、各図も正極図や正図、粗図といったように内容の精度による違いも記されていますが、曲輪の大きさや出入り口の形態、河川との関係が明瞭に分かるように描かれており、縄張を示すことに大きな目的があったことがわかります。

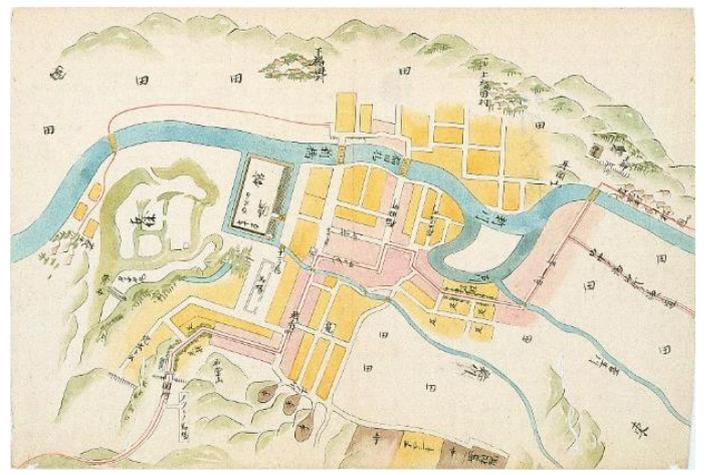
[参考文献]

- ・近藤真史「加賀藩における有沢兵学の展開」(加賀藩研究ネットワーク編『加賀藩武家社会と学問・情報』岩田書院、2015)
- ・深井甚三『図翁 遠近道印 元禄の絵地図作者』(桂書房、1990)
- ・前田育徳会尊経閣文庫編『尊経閣文庫蔵 諸国居城図』(新人物往来社、2000)
- ・森山英一『明治維新 廢城一覽』(新人物往来社、1989)



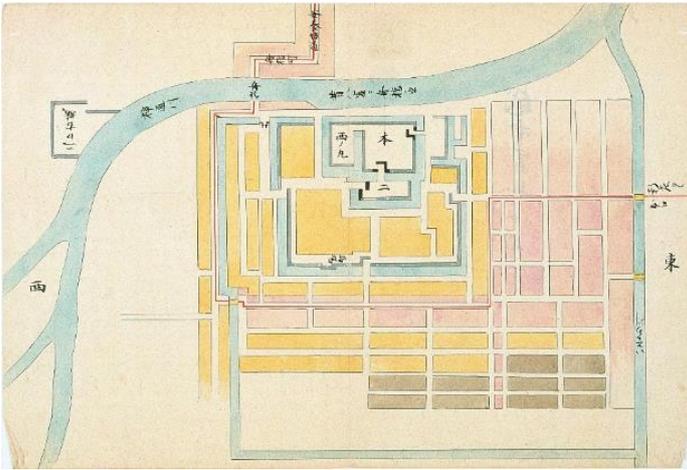
98 加州金沢城図

本図は、江戸で流布していた元和以前の金沢城を描いた図を参照したとする。寛永期以前の金沢城の様相を示す箇所もみられる一方、寛永大火後の様相もみられ、検討を要する図といえる。



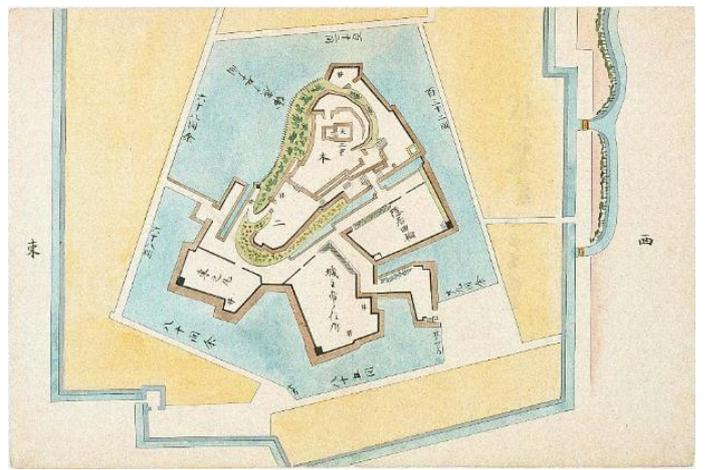
96 加州大正持城図

寛永16年(1639)以降、大聖寺藩7万石の居城。山城の麓に館を建設している。本図では、織豊期に溝口家・山口家が使用していた中世以来の城を「古城」と表記している。



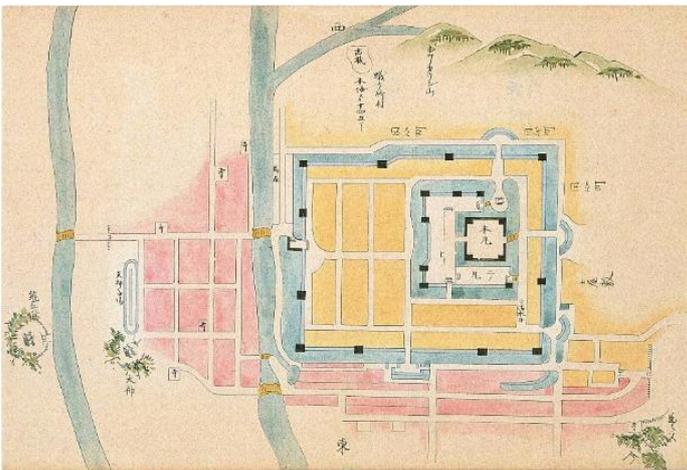
99 越中富山城図

前田利長により整備されるが、慶長14年(1609)の大火で焼失する。寛永16年(1639)以降は、富山藩10万石の居城となる。本図は、神通川を背にした城と城下の全体を描いている。



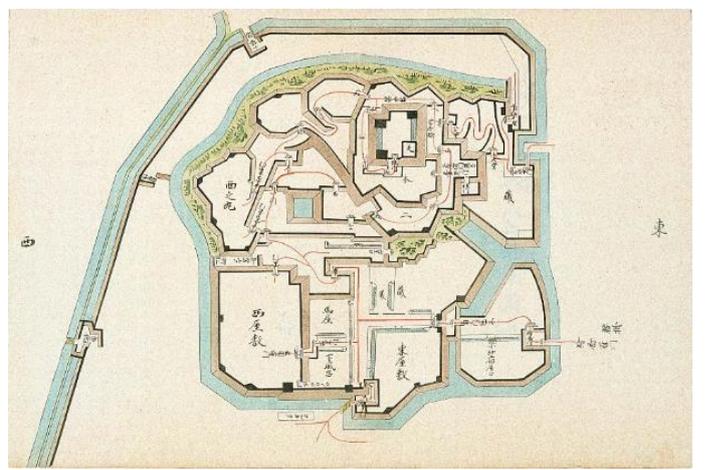
95 越前丸岡城図

キリシタン大名有馬晴信の系統である丸岡藩有馬家5万石の居城。正徳期に譜代格となり、藩主は幾度も幕府の要職に就いている。山麓に築いた曲輪には、地形を活かした幅の広い堀が巡らされていたことがうかがえる。



58 信州松本城図

松本城以前は深志城と称され、現在は烏城とも呼ばれて親しまれている。転封も多く、譜代が入れ替わり入城しており、戸田家6万石のときに明治維新を迎えている。大天守・乾小天守・渡櫓・辰巳附櫓・月見櫓の五棟で形成された天守群は、国宝に指定されている。



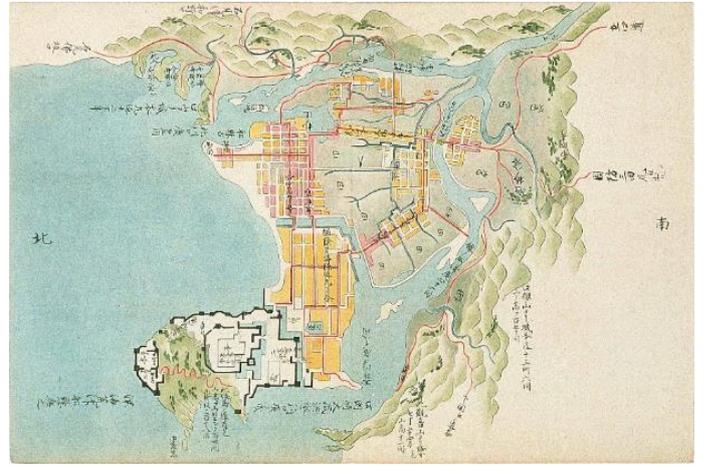
117 播州姫路城図

別名白鷺城とも呼ばれ、天守や櫓といった主要建築物が現存していることから国宝に指定されるとともに、世界遺産にも認定されている。西国統治の拠点として重要視され、江戸中期からは譜代酒井家15万石の居城となった。



82 奥州仙台城図

仙台藩伊達家62万石の居城。青葉城とも呼ばれる。標高約130m、東と南を断崖が固める天然の要害に築かれている。廃藩後は東北鎮台、そして第二師団が置かれた。

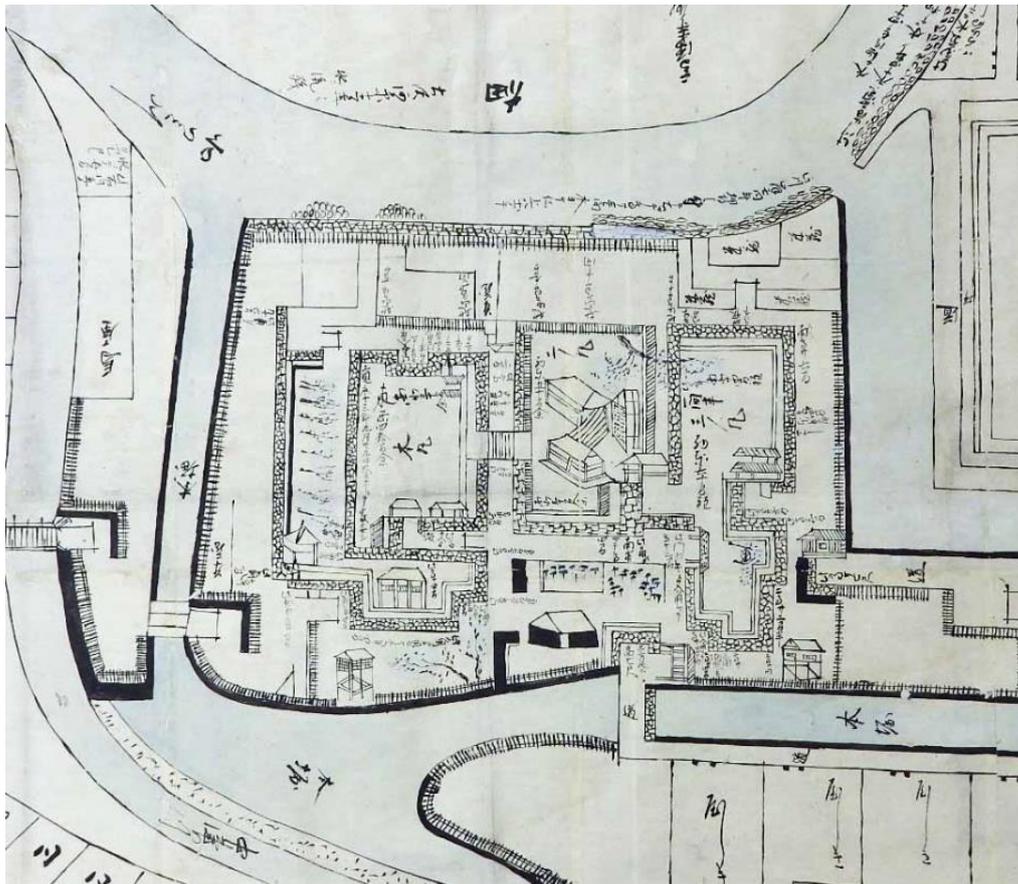


129 長州萩城図

長州藩毛利家37万石の居城。関ヶ原の合戦後に毛利輝元が築城を開始し、慶長期に完成したとされる。日本海と川で囲まれた指月山にて縄張を構成している。

諸国の城図

近世史料館には加賀藩領内の城図以外に、全国各地の城図も収蔵されています。ここでは、そのうちのいくつかを紹介・展示します。



盛岡城之絵図(16.84-168) 部分

盛岡藩南部家20万石の居城。不來方城とも呼ばれ、東北では珍しい花崗岩による高石垣が築かれている。本図には、城内・塁・堀・川・屋敷地が描かれている。

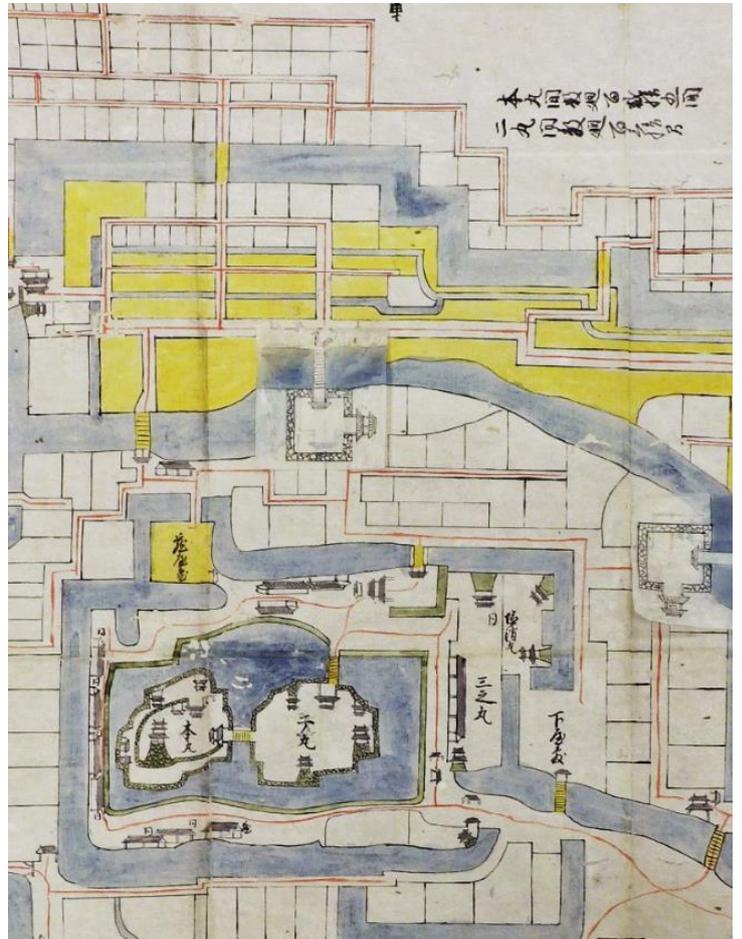


周防国山口新城之図(大1342-3)

幕末期、海防問題が発生し、攘夷論が高まるなか、長州藩が屋形として幕府に届け出、のちに藩主も萩から移っている。山や堀で囲まれており、慶応期における長州藩の政治・軍事拠点として機能した。

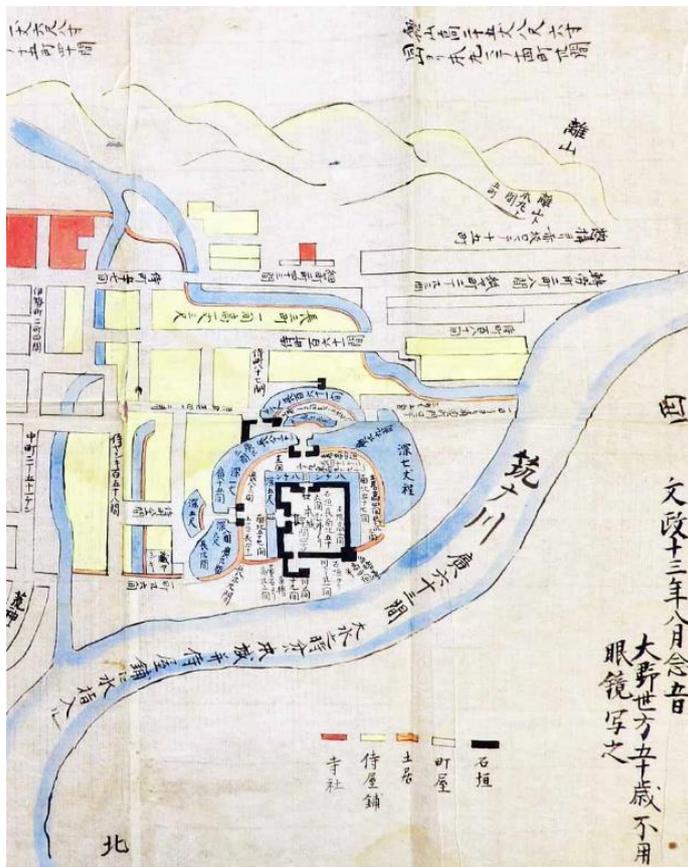
大垣城之絵図(16.84-184) 部分

譜代・親藩が入替わるが、寛永以降は譜代の戸田家10万石の居城となる。本図は、升形石垣の築直し、門などについて、幕府による普請許可の際の絵図である。



信州松代之城図并地割(090-1036-15) 部分

以前は海津城と呼ばれ、戦国大名武田氏にとって对上杉の最前線に位置する城であった。その後、真田信之が入城し、松代藩真田家10万石の居城となる。

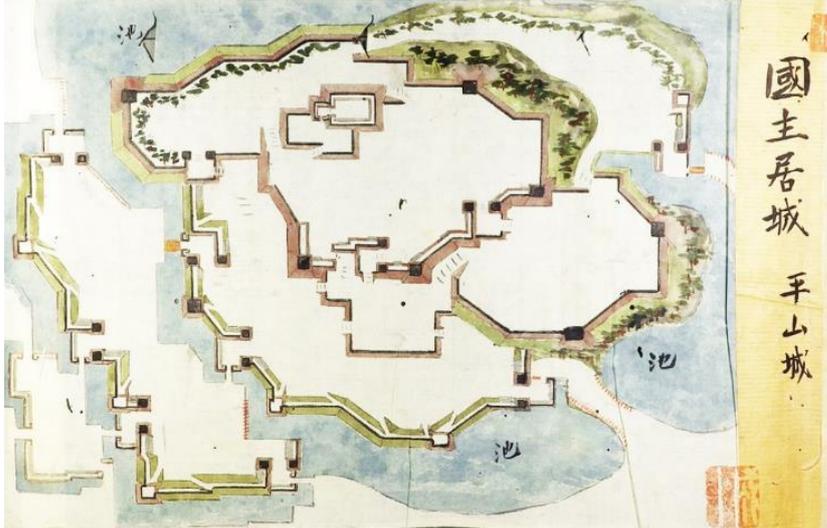


大野世方年十歳不用眼鏡写之

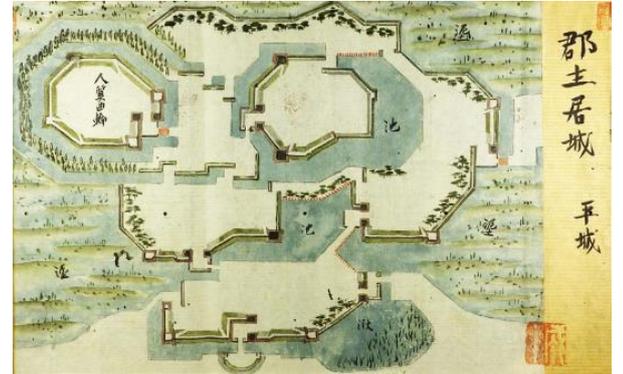
兵学修養としての城取図

近世に武士が学んだ兵学では、堅固な城をどのように造るか、または攻略するかが研究課題の一つであり、それ故に兵学者にとって絵図の作成は欠かせないものでした。例えば、有沢兵学の祖といえる有沢永貞は、兵学修行中の万治元年(1658)には100日で100城を設計したともいわれています。また、有沢兵学の熱心な修学者たちは、兵学書だけではなく絵図についても筆写しています。

九城之図(16.81-428)



国主居城 平山城



郡主居城 平城



境目之城 山城

国主居城、郡主居城、境目之城の3項目に、それぞれ平山城、平城、山城が描かれており、あわせて「九城之図」となる。

城図(16.81-428)



1 平山城



2 山城



3 平城

表題「有沢永貞城図」。山城、平山城、平城を立体的に(象図として)描く。大図の略図として元禄2年(1689)に書いたもの。

全国城郭存廃ノ処分並兵営地等選定方(廃城令)

明治4年(1871)の廃藩置県によって全国の城郭の土地・建物は陸軍省の管轄となっていました。同6年1月14日に出された太政官達(「全国城郭存廃ノ処分並兵営地等選定方」)により、陸軍がこれまで通り所管して行政財産とする「存城」と、大蔵省に所管を変更して普通財産とする「廃城」とに区分されました。また、この達では現在城郭がないものの、新規に陸軍が受け取るべき区域として、七尾など13ヶ所が指定されています。その後、追加の指定や存廃の変更などがあり、「存城」の対象は60城近くになります。

この「存城」処分については、あくまでも陸軍の兵営地などの利用を目的としており、文化財として保存するというものではありませんでした。そのため、「存城」といっても兵営建設や用地確保のために櫓や門が破却される例がみられ、若松城は城郭建造物がほぼ取り壊されています。また、秋田・仙台・金沢の諸城のように火災で主要部分を失ってしまった例もあります。そして、兵営地として使用されていなかった城については所在府県に預けて管理させましたが、修理保存が困難であるとして、盛岡・松江・彦根・鳥取・津などの諸城は、陸軍省の許可のもと、建物が取り壊されました。そのなかで、松江城は地元有志の尽力により天守が、彦根城は巡幸中の明治天皇の恩命によって天守や一部の櫓・門が保存されました。

「廃城」となった城については、大蔵省の所管となった後、県庁などに利用されているものを除いて所在府県に命じて入札、払い下げ処分が行われ、ほとんどの城の建物が失われました。しかし、犬山城は区長の尽力により天守は破却を免れており、備中松山(高梁)城は商人に売却されるも、山地で不便であることから建物は解体されずに放置され、昭和初期に修復されて現存しています。

以上、明治6年に出された達は、全国城郭の存廃を通達するものではありませんでしたが、それぞれの地域の事情もふまえ、現在に至っていることがうかがえます。

近代の金沢城跡

明治4年(1871)の廃藩置県後、金沢城跡は陸軍省の管轄になると、名古屋鎮台の分営が置かれ、櫓や門は順次撤去、二ノ丸御殿も火災により焼失してしまいます。その後、同8年6月に陸軍歩兵第七連隊が駐留しました。

そして、日清戦争後の軍備拡張によって第九師団が創設されると、同29年(1896)に第九師団司令部が金沢城二ノ丸御殿の地に置かれています。これにより旧城内には九師団のほか、第六旅団司令部、第七連隊が入り、郊外の野村にも歩兵第三十五連隊が駐留するなど、城下町であった金沢は「軍都」としての性格を帯びる都市へと再編されていくことになります。

金沢城門等写真(13.0-87)



1 菱櫓



4 百間堀



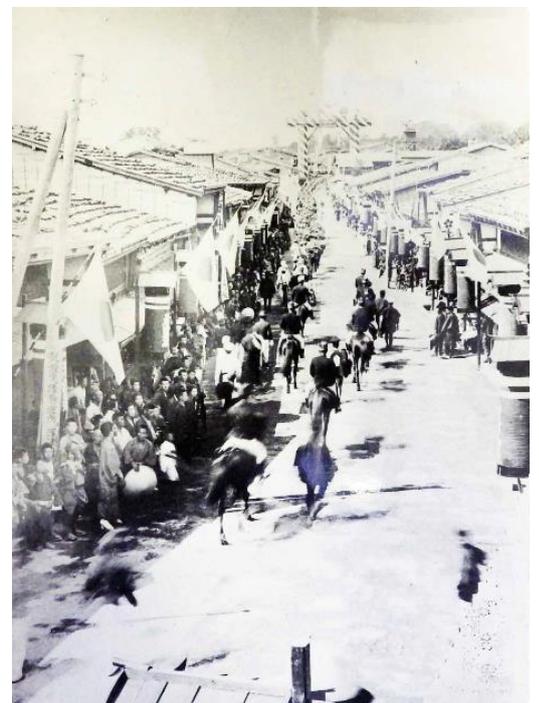
3 鼠多門

金沢城跡管造物配置要図(大2888-4)



明治32年(1899)～大正頃のものとして推定。旧二ノ丸跡に第九師団司令部が配置され、城内には連隊本部・銃工場・将校集会所などが配置されている。

日清戦争凱旋部隊(k3-1575-2)



掲載史料と展示史料は一致しないことがあります。